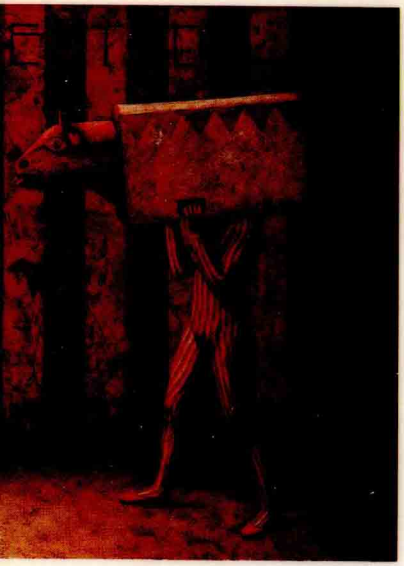

García Márquez

OJOS DE PERRO AZUL

[青い犬の目] ガルシア=マルケス 井上義一訳

OJOS DE PERRO AZUL

Garcia Márquez

[青い犬の目] ガルシア=マルケス

井上義一 訳

福武書店

ガルシア＝マルケス

青い犬の目

井上義一 訳

*

1990年10月25日第一刷発行
1990年12月 3 日第二刷発行

発行者　福武總一郎
発行所 株式会社 福武書店 〒102 東京都千代田区九段南2-3-28
電話 東京 (03) 230-2131　振替 東京2-87372
印刷所 共同印刷
製本所 大口製本
装　丁 坂川栄治(坂川事務所)

定価はカバーに表示してあります
ISBN 4-8288-4009-5 C0097
NDC 990 190 164
落丁・乱丁本はお取り替えいたします

青い犬の目

Ojos de perro azul by Gabriel García Márquez

Copyright ©1972 by Gabriel García Márquez
Japanese translation rights arranged with Stars and Movies
Copyright B.V., c/o Agencia Literaria Carmel Balcells, S.A. Barcelona, Spain
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

三度目の諦め　5
死のむこう側　21
エバは猫の中に　35
三人の夢遊病者の苦しみ　55
鏡の対話　63
青い犬の目　75
六時に来た女　87
天使を待たせた黒人、ナボ　109

誰かが薔薇を荒らす　125
イシチドリの夜　133
マコンドに降る雨を見たイサベルの独白　143
訳者あとがき　156

三度目の諦め

またあの音が鳴りだした。空から降ってくるような、冷たい、耳を刺すその音を彼はよく知っていた。だが、今度の音は耳が痛くなるほど鋭く、一夜にして聞き慣れぬものに変わったかのようだった。

その音に頭の中を掻き回されて、彼は脳が空になった。他の音が聞こえなくなり、ずきずきする痛みを感じた。頭蓋骨の中で蜂の巣をつっついたような痛みだった。痛みは切れ目のない螺旋となって次第に広がり、脊髄を激しく震わせた。痛みは、彼の肉体の正常なリズムを狂わせた。健康な人間としての肉体的構造の中の何かが、彼から欠落したのだ。《昔》は正常に機能していた何かが、今、彼の頭の中をハンマーのように、激しく、容赦なく、叩きつづけていた。その衝撃は、肉のそげ落ちた、骨だけの手で打たれているようにも感じられた。痛みの中から、これまでの人生の苦々しい思い出が浮かびあがってきた。こぶしを握り締めて、青い血管が浮いて見えるこめかみを押さえつけたいという動物的衝動に駆られた。できることなら、ダイアモンドの角のような鋭さで痛みが襲ってくる一瞬を、敏感な両手の掌でとらえたいとも思った。飼い猫のような動作で全身の筋肉を縮めた瞬間、彼は、自分が熱く燃える脳髄の片隅に追い込まれ、熱のために引き裂かれるのではないかと感じた。よし、もう少しで音が捕まえられそうだ。いや、やはりだめか。音の表

皮はつるつるしていて、とても手でつかめそうにない。しかし彼は巧妙な戦術で音をとらえようと、力を振りしぼって、永久に確実な方法でそれを押さえ込もうと、覚悟を決めていた。二度とこの耳から入りこませたりはしない。この口からも、毛穴のひとつからも出入りさせたりはしない。また、目を開けて音の侵入を許し、それによって盲目にさせられ、ずたずたに引き裂かれた暗闇からその音が逃げ出していくのを見のがしたりはしない。この痛んだ水晶、氷の星を頭蓋骨の内壁に押しつけさせることはこれ以上許すまい、と考えていた。あの音は、子供の頭をコンクリートの壁に打ちつけるように、延々と彼を苛んでいたのだった。音のもたらす痛みは、自然界の硬質な物体にぶつかったときの衝撃と同じであった。しかし、その音を捕まえ、閉じ込めてしまえさえすれば、もうこれ以上彼を苦しめることはできないはずだ。影をとらえて来て、さまざまに形を変える音に切りつけてやるのだ。そして、そいつをつかんで締めあげる。今こそ、徹底的にやらなければならない。石畳に力いっぱいたたきつけ、ぴくりとも動かなくなるまで、容赦なく踏みつけてやるのだ。その時こそ、気が狂うほど彼を苦しめてきたあの音に止めを刺したと、息をはずませて言えるだろう。音は完璧な死体として、そこらにころがっている他の物体と同じように、地面に横たわるだろう。

だが、彼はこめかみを押さえることができなかった。彼の両腕は縮まっていて、今では小人のもののようだった。小さな腕には脂肪がつき、ぽってりと太っていた。彼は頭を動

かそうとして、左右に振ってみた。その瞬間、音はさらに大きな衝撃を残して、頭蓋骨の内側を駆けめぐった。頭が硬く膨れあがり、より大きな重力がのしかかってきたように感じられた。音は重苦しく、硬質だった。あまりの重さと硬さに、それを捕まえて壊す時は、鉛の花の葉をむしり取るような手ごたえがするのではないかと思った。

彼は《以前》にもこれと同じくらい執拗な音を聞いたことがあった。それは彼が初めて死んだ日のことであり、死体を目の前にしてそれが自分の死体だと気づいた時のことだった。彼は死体を見て、手で触れてみた。だが、それは触れることのできないもの、空間にはないもの、そこには存在しないものに感じられた。彼はまぎれもなく死体であり、若いが病弱な自分の肉体に、死が訪れたのを感じていた。家中の空気がまるでセメントを詰めたように、固まっていた。部屋の真ん中の――そこには空気が柔らかかった時と同じように、いろいろなものが置かれていた――硬いセメントで作られているのに透明な棺の中に、彼は丁重に納められていた。その時もやはり、《あの音》が彼の頭の中で鳴っていた。足の裏はなんて遠くて、なんて冷たいのだろう、と彼は思った。柩が大きすぎたので身体に合わせるために、彼の足元には枕が置かれていた。死者には新しい衣装を着せなければならなかったので、彼は白い服を着せられ、首のまわりにはスカーフが巻かれた。死者の装束を身にまとった自分の姿の美しさに彼は感動した。冷たく感じられるまでに美しかった。

彼は棺に入れられ、埋葬の準備も整えられていたが、自分がまだ死んではいないことを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

知っていた。起きあがろうと思えば、簡単にできそうだった。少なくとも《頭の中では》そう思えた。だが、わざわざそんなことをするまでもない。このままここで死んでいくほうがよいだろう。彼のいわば宿痾であった《死》を迎えるのだ。ずっと前に、医者が母親にそっけない口調で言ったことがあった。「奥さん、息子さんは重態です。回復の見込みはほとんどありません。しかし」と医者は付け加えた。「死なないように、あらゆる手を尽くして、生命は維持しましょう。自動栄養摂取という複雑なシステムによって、内臓器官の働きはつづきます。運動機能、つまり自然な身体の動きが変わるだけなのです。これから先も、成長は正常につづくことは分かっています。《生きる屍》というわけですよ。本当の死とは……」

彼はその言葉を憶えていたが、記憶は曖昧だった。ひょっとすると耳で聞いたことではなく、腸チフスで高熱を発したときに、頭の中で作りだした話かも知れない。

譫妄状態に陥ったときか、あるいは防腐処理をされたファラオの物語を読んでいたとき、ふと考えたことかも知れない。熱が高くなったときには、彼自身がその物語の主人公になったような気がしたのだった。その時から、彼の人生には空洞のようなものができはじめた。それ以来、どの事件が夢の中のことで、どれが現実の生活で起こったことか、区別したり思い出したりすることができなくなった。それで、彼は今も疑っていた。ひょっとすると、医者はあの奇妙な《生きる屍》の話などしなかったのではないだろうか。そんな言

葉は非論理的で矛盾しているし、単純に考えてもつじつまが合わない。そう考えると、いま本当に自分が死んでいるのかも疑わしく思えてきた。十八年間も、自分は死んでいたのだろうか。

あの時――死んだとき、彼は七歳だった――、母親は緑色の木製の小さな柩を作るように注文した。それは子供用の柩だったが、医者はもっと大きな柩、つまり普通の大人用のものにするように指示した。というのは、小さな柩だと成長が妨げられて、歪んだ死体、あるいは変形した生者になってしまうという理由からだった。また、成長を妨げると回復に気づかなくなる恐れもあった。その忠告に従って、母親は大人用の大きな柩を作らせた。そして、大きさを合わせるために、彼の足元に三個の枕を置いた。

やがて彼が成長し始めると、背丈の伸びに合わせて端の方の枕から、中に詰まった羊毛が抜き取られていった。こうして半生が過ぎ、彼は十八歳になった。(現在、彼は二十五歳である。) 最終的な背丈は普通の大人と変わらなくなった。大工と医者は計算違いをして、五十センチほど長すぎる柩を作ってしまった。彼らはその子が父親ぐらいの身長になるだろうと考えたのだ。父親は未開人のような大男だった。しかし、彼はそれほど大きくはならなかった。彼が父親にただひとつ似ている点は、濃い顎ひげだった。柩の中で見苦しくないようにと、青々と生えた濃いひげを切りそろえてやるのが母親の習慣となった。暑苦しい日には、そのひげのために彼はいかつく見えた。

しかし、《その音》以上に、彼を悩ませたものがあった。鼠であった。子供のころは、鼠ほど気持ちが悪くて恐いものはなかった。彼の足元で燃えている蠟燭の臭いを嗅ぎつけて、あの気味の悪い獣どもが近寄ってきた。鼠は彼の服を噛みちぎり、やがて彼の身体に食いついて、肉を食べることをおぼえた。ある日、彼は鼠たちの姿をはっきりと見ることができた。つやつやした毛並みのすばしこい五匹の鼠だった。そいつらは机の脚を伝って柩によじ登り、彼に噛みついてくるのだった。母親が気づくころには、硬くて冷たい骨だけを残して、自分はなくなってしまうのではないだろうか、と彼は思った。だが正確に言えば、最も恐いのは鼠に食べられてしまうことではなかった。結局そうなっても、骸骨のままで生きつづけているかも知れないのだ。彼を苦しめたのは、その小動物に対して抱いていた幼いころからの恐怖感であった。身体中を這いまわり、皮膚のひだに入り込み、冷たい足で唇に触れてくるその毛むくじゃらな獣のことを考えるだけで、彼は鳥肌が立った。その中の一匹は瞼にまで這い上ってきて、角膜に食いつこうとした。網膜に穴を開けようとして、必死になって格闘しているその鼠の姿は、ひどく大きな怪物のように見えた。その時、彼はもうひとつの死が訪れたのだと思い、迫ってきた眩暈にすべてをあずけた。

彼は大人の年齢になった時のことも憶えていた。二十五歳になった時のことだが、つまりそれはもうこれ以上成長しないということを意味していた。彼の顔つきは毅然として、生まじめなものになったことだろう。しかし、気分のよいときでも、幼年期のことを語る

ことはできなかった。彼にはそのような時期がなかった。彼は死者としてその時期を過ごしたのだ。

彼の母親は、彼が幼年期から思春期にさしかかったころ、実にかいがいしく面倒をみてくれた。柩や部屋の衛生状態を完全にすることに心を配っていた。頻繁に花瓶の花を取り替え、新鮮な空気が入るように毎日窓を開いた。巻尺で背丈を測り、数センチも伸びていることを確かめたときの、あの目盛りを見ていたときの顔はいかにも満足そうだった。彼が生きているのを見ることに、母親としての喜びを感じていたのだった。同時にまた、自宅になるべく人が来ないように気をつけていた。結局のところ、わが家の一室に何年も死人が潜んでいるなどということは、不愉快で不気味なものにちがいない。母親は献身的な女性だった。しかし、彼女の楽天的な気質も、やがて疲れをみせ始めた。最近の数年は、悲しげに巻尺を眺める姿が目につくようになった。彼女の息子は成長しなくなったのだ。何カ月も前から、一ミリたりとも背丈は伸びることがなかった。母親は、最愛の死者の中に、生命の痕跡を見いだす方法がほとんど無くなったことを知ったのだった。ある朝、目覚めてみると、息子が《本当に》死んでいたというようなことになるのではないかと恐れていた。その日、母親がこっそりと柩に近づき、臭いを嗅いでいるのを彼が目撃したのは、おそらくそうした理由からだったのだろう。母親は気の抜けたような状態に陥っていた。近ごろはろくに面倒を見ようともしないし、巻尺を持って来ようともしなかった。彼がも

うこれ以上成長することがないのを知っていたのである。
彼自身も、自分が今や《本当に》死んでしまったことに気づいていた。動きつづけていた器官がひっそりと活動を停止したことから、彼はそれを悟った。全てがまったく思いがけない時に変わってしまった。外からは聞き取れず、彼だけが感じることのできた鼓動も、今ではごくかすかなものになってしまった。彼は自分の身体がずっしりと重くなり、強力で容赦のない力によって、大地という原始的な物質の方へ引っ張られているように感じていた。重力は今、逆うことのできない力で彼を引きつけているように思われた。彼の身体は誰の目にも死体と映り、いかにも重そうだった。しかし、この状態にまでなると、彼はかえってほっとしていた。死を生きるために呼吸をする必要すらなくなったのである。
手を使わずに、ただ想像の中で、彼は身体のあちこちに触れてみた。固い枕の上には、わずかに左に傾いた頭があった。想像の中の唇は、喉に詰められた氷片の刺すような冷たい感触のために、なかば開いていた。彼の身体は、二十五年の樹齢で切り倒された木のようだった。たぶん、口を閉じようとしたのだろう。首に巻かれたスカーフはゆるんでいた。だが彼には、それをきちんと締めなおして、品位のある死者に見えるように《ポーズ》を取ることさえできなかった。筋肉と四肢は、以前のように神経組織に促されても、正確に反応することはなかった。彼はもうすでに、十八年前の思い通りに体を動かせる普通の子供ではなかったのだ。腕は柩の側面の詰めものに押しつけられ、すっかり萎えて、永久に

動きそうもなかった。腹は胡桃の木のように固くなっていた。さらに向こうの脚は健全に成長し、成人としての解剖学的構造を備えていた。横たわった彼の身体はいかにも重そうだったが、何物にも煩わされず、安らかに眠っているように見えた。全世界の動きが突然止まり、その静寂を破るものは誰ひとりなく、大気の軽やかな静謐を乱すまいとして地上の生物の肺がすべて呼吸をやめたかのような、それは安らかな眠りだった。彼は、青く濃く茂った草地に仰向けに横になり、午後の空を遠ざかっていく雲を眺めている時のような爽快感に包まれていた。自分がすでに死んでおり、レーヨンの布で覆われた柩の中に横たわっているのを知っていたけれど、彼は幸せだった。晴れ晴れとした気分だった。初めて死んだ際に、すっかり精気を失って、何も分からなくなった時とはまったく違っていた。彼のまわりに置かれた三カ月毎に取り替えられている四本の蠟燭が、今、一番必要な時に燃え尽きようとしていた。朝、母親が生けてくれたみずみずしい菫の花の涼しげな香りを身近に感じた。白百合や薔薇の花の香りもした。しかし、そうした生々しい現実の中でも、不安に襲われることはなかった。逆に、そのような孤独の中に浸っていられるだけで幸せだった。これから後が恐くなるのだろうか。

そんなことは分からない。緑色の木の蓋に金槌で釘が打ち込まれ、柩が再び樹木に戻れるという希望にきしみを上げる瞬間のことは、考えてみるだけで辛かった。今、大地の強烈な力によって引っ張られている彼の身体は、やがてふわふわして湿っぽい粘土の地中に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com